

<研究室余滴> 「搔く・書く・欠く・懸く」考

ムライ, ヤスオ / 村井, 康男 / MURAI, Yasuo

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

1954-11-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017363>

「搔く・書く・欠く・懸く」考

村 井 康 男

われわれの祖先には古く穴居生活をしてきた時代があるというが、この穴居民たちには、非常に幼稚ではあるが、すでに言語生活があったはずである。その言語がどんなものであったか、これについてはほとんど想像もできない。しかしその発展したものがどの程度にか後世の日本語に糸をひいているだろうとは考えられる。今日の日本語のなかに、穴居生活時代の言語がなにかの痕跡を残していることが無いとはいえない。

日本語には同音異義の単語がたくさんある。例えば、「書(描)く」「搔く」「欠く」「掛(懸)く」等の一群がそうである。これらはいま完全に別語として意識されている。ことに「書」「搔」「欠」「掛」などと漢字があてられているとなおさらそうである。しかしこれらの諸語が同音であるのはまったく偶然の一致であろうか。それらの間には、なにかの親近関係がないであろうか。

うか。

まず「書く」と「搔く」である。このあいだには何か関係がありそうである。そしてこれについては、すでに『大言海』が「書く」の項に「筆尖ニテ紙上ヲ搔ク意ナラム」と記している。

かつてわたくしはこの語源説明を読んだ、何だかユーモラスなものを感じてほぼえんだのであるが、と同時に、次の考えが頭にひらめいたことを記憶している。「筆尖デ紙上ヲ搔ク」ことの始まるずっと以前の時代に、われわれの祖先はさまざまの形象を岩壁などにカキつけていたではないか。

われわれの古い古い祖先が穴居の岩壁などに石器を手にして物の形をきざみつけている有様が思い浮かぶ。それは彼等にとつては、呪術と結びついた重要な仕事であった。その動作が「カク」であった。形象をしるす方が「書(描)く」、岩壁に傷をつけるように強く手を動かす、その動作の形の

方が「搔く」と分化するのは後世のことである。

次に「欠く」である。岩壁を石器などで搔いた部分はこわれ損じる。またその部分はこわれ落ちて無くなる——「不足する」の意味がここから出てくる。岩壁に形象をしるした——すなわち、書(描)いた——部分、そこはけずりとられて「欠け」ていたことであろう。

穴居時代の生活を前提すれば、「搔く」「書く」「欠く」が同一語から分化する過程が容易に想像される。だいたい \wedge KAK \vee という音そのものが、岩壁と石器とのふれあいをしるばせるではないか。「掛(懸)く」も、穴居の岩壁に丸太などの端をもたせかけたことに由来するであろうか。右のような随筆的「カク」考を思いついてから十数年になる。穴居に関する科学的知識などゼロなので、少し勉強してからと思っているうちに年がたってしまった。

現在でも相変らず無知のままであるが、本誌から明日までに何か書けとすゝめられて、苦しまぎれにほんのアイディアだけ吐き出してしまった。皆さんから色々御教示をうけることができれば幸である。